

同人雑誌(2014年創刊号)

# 風 狂

風 狂 の 会

創刊に当って 編集委員長 北岡善寿

齋藤志未刊詩篇

おんな

齋藤 志

詩

風狂の風

高村昌憲

息子の転職

堀口精一郎

ある佛像展にて

中平 耀

下北半島恐山へ

なべくらますみ

戯詩「ようなもの」

北岡善寿

翻訳

アラン『わが思索のあと』

高村昌憲訳

「少年時代」

執筆者のプロフィール

この度「風狂の会」では文学作品を募集して、それを電子書籍によって発表する試みに取り組むこととしました。電子書籍はご承知の通り、紙上に文字を印刷するものではありません。Ｉ・Ｔ革命によって生れた全く新しい発表形態であります。携帯電話が六億台も世界に普及していて、知の格差が縮小される時代に入っているのです。「風狂の会」というのは確かに存在して、それなりの活動はしているのですが、何せ風狂ですから世間並みのことはせず、十年ばかり前に「風狂の詩人たち」という自己紹介的な冊子を発行しただけです。ものを書く人の集まる会としては不甲斐ない次第です。そこで新しい情報文化の時代に入ったのを機縁に、電子書籍による同人誌『風狂』を創刊して、同人以外からも作品を募集し、優れた作品を発表しようということになったのであります。いろんな意味で多難な時代でもありますので、知的な輪の広がることを願っています。なお、作品の投稿規定は下記の通りです。

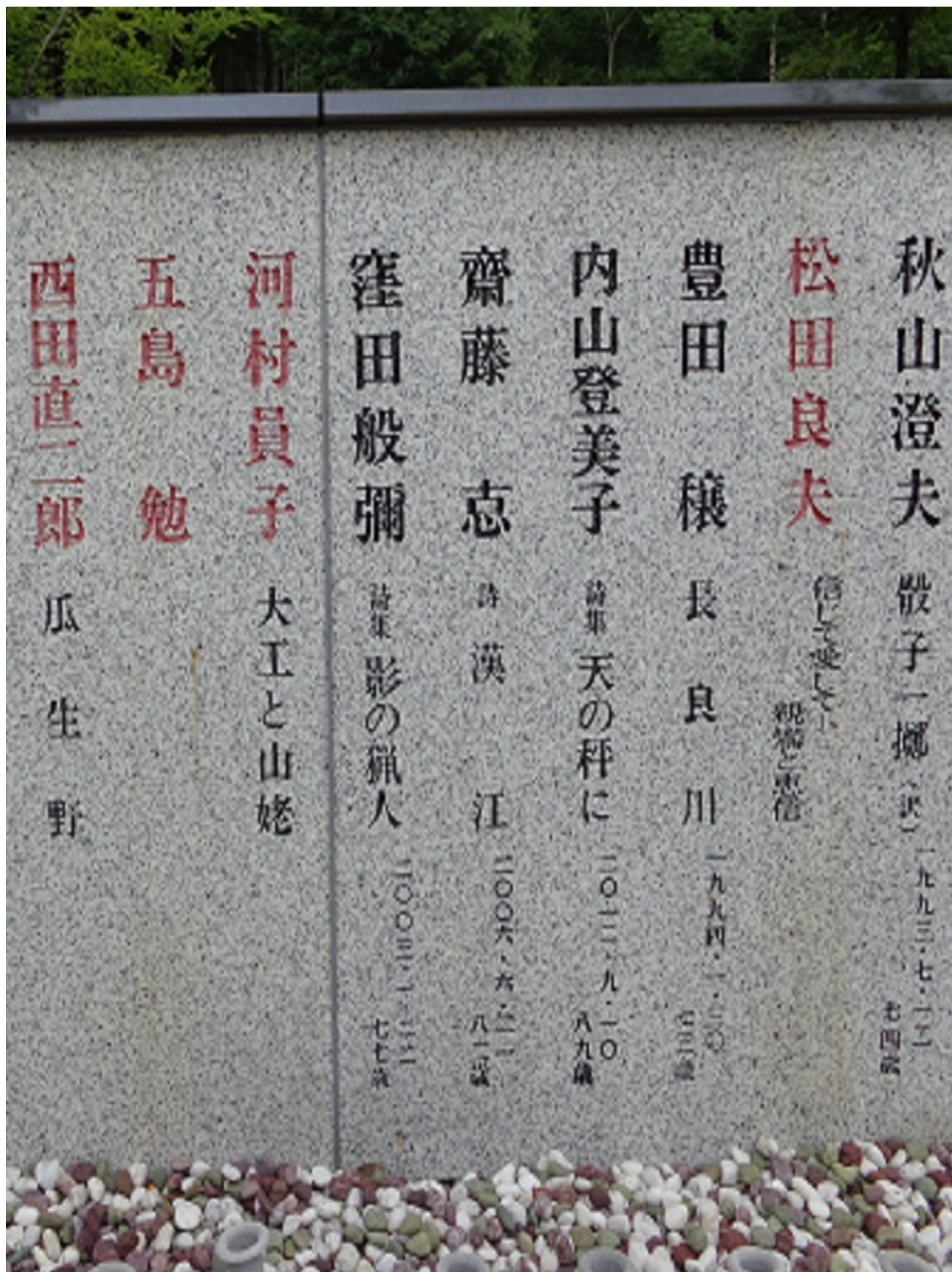
## 記

- ☆ジャンル : 詩歌又は評論等の文学作品で未発表のもの（出来るだけ最新のもの）
- ☆作品の長さ : 詩は400字詰め原稿用紙5枚相当以内、散文は50枚相当以内（長文は翌月以後に分割する場合がある。）
- ☆締切り日 : 毎月15日（必着）
- ☆発表方法 : 締切り月の19日までに「ブクログのpapier」の高村昌憲のページに登録
- ☆掲載費用 : 無料
- ☆校正 : 原則として編集担当の責任校正とする。
- ☆投稿方法 : 郵便番号・住所、電話番号、本名、年齢（以上の「個人情報」は公表しない）、「作品」及び「執筆者のプロフィール」（400字程度以内・『風狂』にて公表する）を次の①又は②（詩の場合は③でも可）のどちらかの方法で投稿して下さい。
- ①「作品」及び「執筆者のプロフィール」を電子メールの<本文>又は<添付ファイル>（「ワード」又は「一太郎」）により、高村昌憲のメール・アドレス<masanot@b01.itscom.net>へ送信する。次に、「個人情報」を含めて印字した紙媒体の各原稿を下記の編集担当者（高村昌憲）へ締切り日までに郵送する。
- ②USBフラッシュメモリー又はCD-Rの電子媒体へ「個人情報」、「作品」及び「執筆者のプロフィール」を格納して、それらを印字した各原稿と共に下記の編集担当者へ郵送する（電子媒体返却用の返信用封書も切手を貼付して同封すること）。
- ③作品が詩のみの場合は紙媒体でも受け付けるので、「個人情報」、「作品」及び「執筆者のプロフィール」の各原稿を下記の編集担当者へ郵送する。

〒216-0011 川崎市宮前区犬蔵2-30-23

「風狂」編集担当 高村昌憲 宛

（以上）



秋山澄夫

散子一擲(共)

一九九三・七・一二  
七四歳

松田良夫

信じて愛して、  
親密と恵徳

豊田 穰  
長 良 川

一九九四・一・二〇  
七三歳

内山登美子

詩集 天の秤に

二〇二二・九・一〇  
八九歳

齋藤 忘

詩 漢 江

二〇〇六・六・二二  
八一歳

窪田般彌

詩集 影の獵人

二〇〇三・一・二二  
七七歳

河村員子

大工と山姥

五島 勉

西田直一郎

瓜 生 野

富士霊園の「文學者之墓」に眠る齋藤 忘の墓 (2014年6月撮影)

戦地に向う眠れぬ息子の床に入り  
せめてもと女を与えた童貞の母  
きりきりと心に雪が降りしきり  
竹林も冬の風に鳴っただろう

女はいつも切羽詰った男を抱いた  
泉に餓(かっえ) 男は胸に顔を埋めた  
涙の谷にうつつは消えてうつつは浮かび  
遠くしおさいの音がしていた

海の彼方に大きな月が登っていた  
口笛はひょうひょうと波間に消えて  
男は今日も孤独な旅をつづけていた  
子を抱き 女は空耳の口笛を聞いた

いのちを育む女の胸に菩薩は宿り  
子を護る女の心に夜叉は宿った  
恥じらいのうなじをおおう髪の乱れ  
誕生の秘密を孕む白い腹

潮の満ち引きを羊水にしっかりと捕らえ  
この土に新しい今を生み続けて来た女たち  
時の筆が今日も永遠の線をたどりつづける  
アトリエの窓に今年のわくら葉が舞いおちる

風狂の風

——『風狂』創刊に寄せて——

高村昌憲

その桜はなだらかな傾斜地の  
中腹に設けられた舞台上踊る  
その姿に世俗から離れたヒロインの  
華やかでそして悲しい孤高を観る

その桜は樹齢千年と言われながら  
葉の花畑の上に若々しい色を広げ  
人の心よりも確かなのは四月の青空  
亡くなった何人もの恋人たちを映す影

その桜は観る位置によって姿を変え  
時間と共に花びらの色を変えて動き回る  
絶えず動くのが生きている証しと思え  
停止するものには確実に死が訪れる

その桜は日本三大桜の一つと言われ  
長閑なさくら湖畔に何台ものバスを呼ぶ  
高貴なヒロインを観たくて観客の列は揺れ  
丘に建つ大聖堂へ向かう巡礼者たちが並ぶ

その桜の名前は東北の小さな町の「滝桜」  
まさしく滝のように枝垂れ桜の花々が咲く  
美しいものは正しいと言っている哲学者から  
讚美の声を聴きながら何処かで風狂の風が吹く



福島県三春町の「滝桜」

男四二歳 リストラの嵐のなかで希望退職  
退職金で鎌倉の海のみえるマンションを買った  
子供はガラス細工のような目をきよろきよろさせて  
パパをアンニヤと呼んでいる

学生時代から九十九里浜 バリ島 ハワイと  
サーフィンに明け暮れた  
会社の頃は朝から夜十一時過ぎまで働く  
今は波の荒い朝は真先に海に飛び出す

人生にひとつの崖っぷち さてこれからの丁と半  
アンニヤはにやり笑って やりたいことをやるだけさ  
あれから一〇年 夢のまた夢

鶴沼の彼の新居をたずねると  
笑い声を立てて家族みんなで新蕎麦を食べていた  
大気は冷え 草木は枯れる夕暮れどき



上野の杜である佛像展を見た。  
琵琶湖北岸のお寺やお堂に  
昔から祀られてきた佛像たち。

どの像も優雅なたたずまひだが、  
千年以上もの長い年月の手が  
顔や身体や衣装を粗く削つてゐる。  
腕や手指の缺けたもの。  
首(こうべ)のないものもある。

中でも二體の像が私の足を止めた。  
二體とも首はあるが、  
手も指も衣装も満足ではない。  
信長の軍勢が攻めてきたとき、  
村人が川に沈めて戦火から守つたのだと云ふ。  
当時の村人たちの一途な熱い思ひ。  
胸に込み上げてくるものがあつた。

会場をまはりながら思つた、  
國ぢゆうのお寺やお堂に祀られてゐる  
数知れない無名の佛像のこと、  
田舎の道端に立つてゐる  
お地藏さまや道祖神のこと。

それらの像の向う側に廣がる  
目に見えない奥深い暗がりから  
往時の村人たちのつましい暮らしの聲が  
低く聞こえてくるやうな氣がした。

◎硫黄の原

車を降りるなり襲ってきたのは硫黄の匂い  
咽から胸へと襲ってくる  
息苦しさ  
死者の怨念ではなかろうに  
大祭前の霊場

歩くところどこも  
瓦礫のような岩と立ち昇る  
瘴気  
風もないのに音をたて 廻り続ける風車  
赤 紺 桜色

行く先々に立ちつくす石仏たち  
野仏のように笑ってはいない  
険しい顔 どれもしっかりと頬被りをして  
寒気と吹き荒ぶ風から守ろうと  
信者たちの想い

この季節にはない筈の暑さ  
立ち上る熱気があおる  
花の白さ その名を知りたい

熱風が  
地蔵の衣を揺らして過ぎる

◎巡るところ

足元の焦げた石 あっちにも こっちにも  
一人座った大きさに染みついた硫黄の色

納骨塔を守るみたまいし 転がされたように

惑わされた参拝順路

いつの間に表示から外れて

無間地獄

崩れそうな灰色の石に挟まれた風車が

いっそう乾いた音を立てる

無縁塔

延命地獄

息苦しく歩くわたしは延命を望まない

無縁の人と歩くことも

その人と共にいることに

どれほどの意味があるのか

迷った道に戻り また同じ道を歩く

胎内くぐりを通った人は

満ちたりた笑みを浮かべ腹に手をやる

地獄の原で

千本の手を持つ観音は

どれほど多くの水子を抱きしめた

雨 風に染められた頬がうっすらと汚れて

生真面目な父親を泣かした

あるいは父親自身が溺れた

賭博地獄 修羅地獄

見てしまったのか

溺れこんだか 血の池地獄

歩き疲れたわたしは

賽の河原に向けて

石を投げる

ひとつ ふたつ

と自分の声を気にしながら

女の尻ばかり追いかけているとか  
力もないのに威張りくさっているとか  
そんな腹の足しにもならぬ悪口は止めて  
もっと根源的な問いかけを  
己自身にぶつけてみるがいい  
先ずはあの神様のことだ

—いったい神様はいるのかね  
—いたにはいたが死んだのだ  
—誰か亡骸をみたかね  
—見た者はないけど西洋の哲学者  
とかいふ者に引導を渡されたのだよ

人間に死んだと見くびられる  
ような神様は本当の神様ではない  
いいかね  
神様は元もとこんなところにはいなくて  
神様のような者が居ただけなんだ  
今でもそれは薄っすらと動いているよ

いいかね  
神様のようなものの下に  
人間のようなものが居て  
外でも家の中でも酒ではなく  
酒のようなものを飲んで酔っ払い  
病気になると薬のようなもの  
を飲んで苦しんでいるのだよ  
この世の間違いの本は神様ではなく  
神様のようなものから始まったのさ  
だから世間では政治家ではなく  
嘘をつくことが商売の政治屋  
のようなものが偉そうな顔  
というよりも狸面して横行し  
金持ではなく金持のようなものが

数字を刷った紙片を黴菌のように  
ばらまいてほくそえんでいるのだよ  
繁華な街の地下道では  
乞食でなく乞食のようなものが  
ダンボール被って寝ているし  
鉄筋コンクリートの学校では  
先生のようなものがいて子供に  
学問のようなものを教えているよ  
だから成長しても人間ではなく  
人間のようなものにしかなれないんだ  
虫けらにだって五分の魂があるというが  
それは何故だか外からは見えない  
人間のようなものはそこが違って  
背広の襟や生白い首の回りに  
魂のようなものをちらつかせているよ  
「ようなもの」ばかりで成り立っている  
有象無象の世の中なのさ  
そう思えば何が起ころうと腹も立つまい  
俺もお前も人間ではなく骨のない  
海月に近い人間のようなものだから  
気を楽にして  
気紛れに気違いじみたことを書く  
詩人のようなものの大法螺や  
女子大生が売春しているのではなく  
淫売が女子大に通っているのだ  
との給う批評家先生の漫談にでも  
耳傾けて楽しもうではないか

いいかね

黴菌や蝮は「ようなもの」ではなく  
文字通り棲息しているが  
これは人間のようなものが創ったものではない  
もちろん神様のようなものの設計から  
生れ出たものでもない  
ところでここに理屈の隙間があるのだよ  
大砲も爆弾も毒薬も

「ようなもの」とは言えまい  
作り出したのは人間のようなもの達なんだ  
「ようなもの」でないものを作らねばならん  
という法があるわけでもない  
心底人間ならば作らないだろうよ  
何と言ったって  
人間のようなもの達には血腥い戦争が  
身体に痺れが来る程こたえられないのだよ  
そんな頭と身体の仕事が運の尽きなのだ  
これは他愛もない世迷言かね  
何せ神様ではなく神様のようなもの  
が高い所にでんと坐っておって  
人間のようなもの達を練り信心させて  
賽銭巻き上げるから適わんのだよ  
人間のようなもの達は哀れにも  
信心すればご利益があると  
簡単に思い込むほどくそ真面目だが  
どうしてどうして  
神様のようなもの以前にいた神様なんて  
至って不真面目で  
気紛れでやきもち焼きで  
その上癩癩持ときているのだよ  
海の向うの遠い国では皆

\*腕白小僧が虫けらを扱うように

神様は気晴らしに我々をお殺しになる  
と神様の正体を嘆いたものがあるが  
こちらでは戦争で神風が吹くと信じていた頃  
とうとう風はそよとも吹かずに国は破れた  
神様ではなく神様のようものに  
大風を作る力のあるわけではないのだ  
やっぱり人間のようなものは  
何処まで行ってもお目出度いのだよ  
幻想に酔っては後で臍を噛むだけだ  
抜穴だらけの法律のようなものは作れても  
真の法は何時までたっても作れはしない  
土俵の上ならもう死体で

こんな時代に生きている俺たちは  
死んだ方が増しなド阿呆だよ  
だからと言って  
「ようなもの」から逃れて人間に成ることは  
空気のない地球の外へ  
裸で飛び出すようなものだ

\*沙翁「リヤ王」より

## 少年時代 (ENFANCE)

生徒でも弟子でもないと言える人で偏見のない公平と思える人物が、私の思想の経歴に興味を持って、詳細に書くように勧めました。この言葉が稲妻のように私の体の中を巡ったのは、一九三五年の今年の夏です。私は打ち明け話が好きでなく、小説の形であっても私生活のことを書くことはそれまで出来ませんでした。恐らく、そのことを考えるのは余り好きでなく、そうしないで私は自分を慰めていました。私は、忘れては再び始める術を心得ていました。ところがこの実際的方法は、箴言的になるしかありませんでしたから、物語にはなりません。自分を語らないのがその時の一種の規則であり、殆ど冷酷なことで、それは忘却へ導かなければなりません。

『大戦の思い出』を書いた時、私はこの規則に従いませんでした。だがその上更に、紙に書かれて三年以上になりますが、私はそれらを保存していて、再読しようと思っていますが、再読することを恐れもします。この投げやりな態度は恐らく、私が火に投げ入れるのも思い止まらせています。それらが何時か日の目を見たとしても、既にきちんと話すべき告白は見当たらないでしょう。というのも、それらは全く大胆に書かれています。なお至る処が慎重であるからです。私は一度も告白することがなかったので、私の思い出は当然何時も手を加えて整えられているかの如く思われています。

しかし、私の思想は反対に公言しております。非難されるとするなら一種の怠慢以外にありません。役立ったことは多くあったと思います。行動から思索を分離するための巧妙な方法は多くあると言われていました。でもその様な分離は、私には少しもなかったと直ぐにでも言いたいのです。全く反対です。思索は何時も私に与えていて、今でもある絶望、検討すべき非常に急を要する問題、又は他の言葉で言うなら、愚かさを乗り越えるために絶えず私を綺麗に洗ってくれました。その他のことは危険を伴う決心、そして完全に軽蔑すべき考えによって、成るように成りました。それらがもしも秩序を維持したり、多くの正確な真実と釣り合うために真っ先に何時も気を遣うものでなかったなら、私は遙かに遠くへ身を置いたことでしょう。しかしこの思索という宝物は、何を目指して私に何故預けられたのか私は知りませんし、それを知ろうとも思いません。この考えは、私が解けない疑問には関心を持たなかった優雅さを持っていたと予感させますが、更にその上で私はその理由をとうとう最後に知ることになりました。私は、人生を導くことについての思索による行動に関して、言いたいことに戻ります。一つの例しか挙げません。それは大変に簡潔ですが、多分良くあることではありません。高等師範学校にいた時でしたが、数人の仲間たちと一緒に私は酒を飲むことを覚えました。ある晩、私は良い気持ちになってふらふらに彷徨って、崇高な文章を何頁か書けるように感じたのを思い出します。ペンは飛んでるように書けました。しかし朝になると、それは何でもない文章で、寧ろ私が何時も犯して仕舞う愚かさの見事な実例でした。というのも私の生活において、何か外観を美しくするという愚かさを、



心の中で制する必要がなかった日はないからです。ところがこの様な場合、私は自分で自分に感心して陶醉していました。その時私は、自分が怖くなってアルコールを止めて仕舞ったことを敢えて言います。その後三十年程の間、会合の席ではコーヒーとミルクしか飲みませんでした。例外がなかったとは言いません。というのも何時も私のために、愚かなことでも飲まなければならぬグラスがありましたし、そのことは一度も飲まない訳にはいかないことだったので。ですから私は偶然に酩酊したのも認めますが、最早その様なことは信用しませんでしたし、望むことも求めることもありませんでしたし、高貴であろうと考えたのです。さて前置きはこれで十分です。というのもこんな調子で私は自分のことを語って喜んでいられると思われているからですが、この喜びは酩酊のようなものが全てである限り、私にとっては軽蔑すべきことです。私はここで酩酊でないことなら何時間でも語りたと思いますし、最終的な私の生き方なら喜んでお答えします。

少年時代のことを言うのは少しにします。何故なら愚かではなかったからです。私が模倣し、暗誦し、演じ、読み、終わりのない話を自分で語っていたのは、基本的には二つの児童書を真似ていたのです。一つは『騎士バイヤールの物語』であり、もう一つは地下道の物語である全十二巻のもので、表題は『ヴィクトル又は森の子供』でした。今日でも私が何時も平然として無敵の英雄である冒険物語を自分に語るなら、何時間でも出来ると思います。自己から自己への物語である私のこの全生涯は、戦いに次ぐ戦いでした。何時も敵を絶滅させることが重要でしたし、私は遠慮しませんでした。『宝島』を読む前から私は、想像上の島を良く思い描いていたのを今でも覚えています。この点からすると私は、何の進歩もしていませんでした。これらの物語は全てが途轍もない愚かさを表しているのは同じです。ここには戦争と名誉と力を愛する人間の一面があります。他の人々にもそれと似たものがあるのを私は良く知っていました。恐らくそれは人々が思想と呼んでいるものに、不実にも混じり合っています。私としてはこの種の栄光は大変な侮辱と思っていますし、それは休戦後にメッツに入城するフランスの将軍に大変良く似ているようなものです。ところで私は将軍になる夢をみました。勝利し、支配し、強制し、脅えさせる夢を見ました。私は今でもその様な夢に、一種の寛大さを持っています。しかしながら、私はそんなことを少しも信じていません。この状況を十分に説明したいと思います。私は一度ならず意味ありげな夢を見ました。つまり睡眠中に、私はアカデミーから受賞されたとか受勲されたのです。私はそのことを注記します。何故なら夢の中では嬉しく感じたからです。ところで酔い心地の夢想は、平凡な成功以上に順調に行きました。私は決してそれを信じませんし、何時も中身の無い奇妙なものを感じていたと言いたいのです。例えばもし私がお金持ちであると夢想したなら、そのお金持ちには何の根拠も無く、私には奇妙に思われました。労働のことは考えませんでした。そのことを考えなかったことも同時に奇妙だったと私は思います。同様に、私は自分が暴君であると理解しましたが、どんな風になったのかは分かりませんでした。そして、直ぐにその方法を見付けようと良く考えましたが、自分が信じられるようなことは最悪のことばかりで、喜べるものではありませんでした。アレクサンダー大王もカエサルもナポレオンも、私がそうならないように何時も誓っていたのですが、動物のようになった時期があったと、私は納得させられ

ています。私の野心に関する歴史全体は以上の様なものです。

従って少年時代は、全てが愚かであるように愚かです。私はそこに二つの変化しか注意して見ません。一つは私を明晰にすることであり、もう一つは曖昧にすることですが、それらは思考を変化させるものになります。前者は幾何学です。モルターニュの学校で司祭から教わりましたが、彼は幾何学を理解していませんでした。私は、第四学級(1)生徒が使用する、小さな教科書を手を持つ彼を今でも想像します。この教科書を私は一度も読みませんでした。大学並みの教育を始めたがっていた彼は、黒板に図形を書いてから、その証明を大声で読んでいました。そしてユークリッドによる論理的証明が彼を少しも感動させていないのは明らかでした。この本につけ加えたことになる彼の仕事は、定規とコンパスで結論を確認することでした。そこで私は、少しも幾何学らしくない幾何学のようなものが生まれるのを見ました。それと同時に、他に本当の幾何学があるのではないかと疑いました。私はそれを疑い、そこで何か新しく美しいものを稲妻のように見ました。それは翌年にリセのアランソン校の第四学級へもう一度やり直した時に、完全に確認されました。

もう一つの変化は、全く根本的なことでもありました。十二歳になるまで私はカトリックの公教要理を学び、私の罪を懺悔して信仰というもので聖体を拝受して、お祈りを唱えていました。私はそれを覚えております。というのも地獄とか悪魔が大変に怖かったからです。勿論、私はミサに応えてロザリオの祈りを唱え、その点に関しては更にその上で素直で評判が良く、生粋のペルシュ人そのものであった友人のガスランに劣ることはなかったとも言わなければなりません。そして彼は今もその儘です。私たち二人は、町に危篤の病人がいれば何十回もお祈りを唱えることが任された組を最初に作りました。時々、校長の家の庭へ行かされて、ロザリオの祈りと祈りの間にスグリの実を食べるのが許されたことを私は思い出します。ここでも欺瞞は少しもありません。反対に二人の新人の美德は純粋でした。ところがその後二、三年経って、私は最早この率直な宗教心が心の中から無くなって仕舞いました。何故その様な変化が起こったのか、私は言うことが出来ません。恐らく、筋肉が強くなったので、恐怖が支配するのを止めたのです。私の少年時代というものは臆病でした。恐ろしいものを想像していました。単に悪魔ばかりでなく、あらゆる種類の泥棒もありました。私は泥棒の話を変に真剣に聞きました。人気もなく樹木で覆われたこの地方には、屢々泥棒がいたのです。ところが、あらゆる恐怖が全部消え失せたのです。あるいはもっと正確に言うなら、私の行動を支配していたものが全て一緒に消えたのです。私は、宗教は恐怖でしかないとは敢えて言いません。兎に角、宗教が私から去って行ったのは、恐怖が去って行ったのと同様であったことは事実です。

私はこの一節を書くについて、沢山考えました。つまり当時は殆ど気付いていないことでした。その点について一言で言うなら、私は最初の動揺が殆ど変わらないことに納得しましたが、それらの動揺が男の勇気ある働きで抑えると、それらは治まり、忘れるようになります。一つの働きが他の働きを抑えるのです。行動を起こす前は怖い、と英雄たちは良く言いますが、少しも重要なことではありません。妄想を前にする時は直ちに行動することです。つまり望んだことを実行すること、見に行くこと等々です。この恐怖は、極めて短時間で減少させなければなりません

。そこから疑い深さによる活動そのものようである勇気が、直ちに神々や悪魔から逃れさせてくれる結果になります。その上、私は実力を付けたのと同時に、リセの友人たちの見本になるのは別にしても、人間による指導の元に移りました。そして彼らの間で、私は信者を引き合いに出すことは出来ません。私のガスランは、そのことを如何に考えるのでしょうか。そのことを知る機会には私には訪れませんでした。しかし彼が農民として、決して疑問を持たなかったことを私は知っています。今でも恐らく彼は、王党派としての信仰者です。ところでその後、もし私も良く望めば、信仰者で王党派になり得る何かを持つことを人々は知ることでしょう。私も良く望めば、という言葉は異端者として焼き殺されるものなのです。更に簡単に言うなら、その様な人々が宗教は信じ難いものであり、そこに這入るためには天からの救いがなければならないと言う時、何時も私をびっくりさせます。パスカルも同じで、私をびっくりさせます。私は寧ろ反対に感じています。私が知り合ったあらゆる人々の中で、私はその点では恐らく最も非宗教的であると自分で信じています。結局のところ、皆が仮面を脱ぎ、役を演じるのを止め、月並みな思想から離れて独りになれば、私以上に宗教的でなくなることを私は確信しています。彼らが演じているこの喜劇は政治的です。

如何なる観念もなかったように思うこの経験に戻りながら、私はそれでもその感情が実際の活動でしかないのを知るために、重要な観念を強固にして成長したと私は信じています。何故なら、最初の恐怖を軽蔑することと、デカルト流に肉体と精神を見分けることは同じであるからです。そして、それは勇気という活動によるのです。もしも機会があったなら、感情の中には決して思考がないこと、感情は何も言わないし何も証明しないことを、その後で自分で理解する準備をするのです。以上が私の考えによる証明のための本当の検討です。又、一度ならず何度もそれを私が注意するように、証明を要求しなければならないのは幻想ではないということです。というのもその場合、反論出来ない幻想は決して見ないことでしか誰も確信出来ないからです。しかし寧ろあらゆる思想は、何ものでもない幻想によって始まることも知るべきです。それ故に、それらの幻想は全て最初に送り返され、そして人間の肉体に蓄積されて、そこに本当の場所を見出すのです。それらは最早、そこから戻って来ません。

その後、私は如何なることについても、判断が自由である限りでしか熟考しなかったことを人々は理解します。この時期から行為において迅速で生き生きとして自由に行動するのが、私にはお気に入りになりました。これと同じ行動が、他の多くの人々にもあるのに私は気付きました。そして強制とか、少なくとも討議の末の見通しは、何時か突発的な反論に目覚めることしかありませんでした。それは状況を変えながら、無用にすると同時に人が行おうとした熟考の全てを圏外へ追いやるのです。怒りに先立つ一種の暴力であるこの性格の特色は、今日でもなお人が私を恐れるかもしれない唯一のものであります。私の自由を妨げたい人に、私は大胆にその自由を証明します。この種の決心の内容は、決して全て似ていないのですけれども、屢々極端な悪意を意味しています。ところで、これらの取り消しの出来ない突然な方針の変更を熟考して以後、それらが私の思想の方向付けにおいて、特に役立ったことを私は理解しました。私が捨てたいものはもう思考しないという方法も、これらの肉体の急激な変化から生じています。人々は少しも信じよう

としないのですけれども、その結果には驚かされます。そして或ることを最早考えないと決心した時から私は、邪魔者を永久に排除する命令を与えた暴君に似ています。この単純化の精神は、思考においては卓越しています。かくして私は屢々、自分で決めた最初の決心に身を委ねて、最早戻らないで書くことは、その態度における決断をも表していました。私は不決断から解放されて自由でした。書く行為においては今でも私は、熟考するに不確実なことを屢々選んでいます。私にとっては仕方がないのです。この選択に満足しなければなりません。何故なら、私は後戻りするのが大嫌いであるからです。書いたものを修正したり削除することはありません。そうして私が注意していることは、決意することと行うことに決して相違がないということです。大分後になって、修正しないで良い形式に基づいて書くことを、既に学識の深い少年たちに勧めていた時に私は次のように言うのでした。「特に考えてはいけません。書いて下さい。書き始めて下さい」。この方法は、奴隷であることを全て終わらせます。不都合なのは屢々失敗することです。しかし、私が何時も定めている規則は、修正するのではなくて、寧ろ全て最初から書き直すことです。ところが大変に乱暴なこの種の方法は、私が実用的問題に応用すると、第一印象は何か冷酷な感じがしました。決して戻らないというのは、厳しいことです。昔に戻ることを止めるのを学ばないのは、屢々私にも余りに困ったことでした。デカルトが言うように、それは後悔から自由になることです。従って私は、デカルトを私に相応しい先生と認めたのです。デカルトをそんなにも好きな訳でもありません。しかし、ここでは好きとか好きでないとかが重要ではありませんでした。最初の思考から逃れて、迅速に選択しなければなりませんでした。人は選択しながら、見捨てたものを全て取り戻していることを、その後私は知りました。私が知る限り、ここに実際の哲学の姿が現れます。そして私が信じるのを止めた時、その年齢で私は哲学にも他の如何なる知識にも関心がありませんでした。私は、強制されてラテン語、ギリシア語、フランス語を学びましたが、退屈することもありませんでした。私の注意は、バカンスの楽しみに全てがありました。例えば大人の労働に参加すること、畑の収穫で私の分を行うこと、馬の調教を手伝うこと、狩猟の勢子(せこ)や獲物袋運搬人をやること、鯉やザリガニを釣ることです。

そのことで私は、注目に値する二つの例外を良く見てみます。最初は、幾何学に関することです。それはリセで、細心綿密な人間によって説明されました。彼は経験を超えて証明を把握するのを覚えた人物でした。彼の何時ものやり方は、描いた図形を前にして、ゆっくりと独り言を言うことでした。私たちにとって重要なことは、彼の極めて慎重な話の内容を記憶に留めることでした。そして一言も変えることを彼は許しませんでした。私としては理解することとは、直ちに行うことでした。しかし言葉遣いが初めて私の注意を占領していました。以上は何となれば、従って、それ故に、という連結語の意味にも私は注意しました。曖昧でなく、そして出来るだけ最少の言葉で言う技術に興味を持ちました。私は、最少の文字で言われたことを好むまでになってきました。私には自分を訓練する機会があったのです。何故なら、三か月毎の学期末の作文試験で、私たちは授業中の問題と呼ばれていたものの後に、純粹幾何学の難問が課せられたからです。そして私は、どんな問題でも一回で十点を取って一番でしたので、私が何時も同じように十点が取れるかが、私や皆にとっての一種の賭けでした。教師は私の答案を勢いよく掴み、問題

に目をやり、そして微笑しました。ところで、その十点（それは最高点で、それまでは一度も貰ったことがなかったのです）は、問題の解答が上品に展開されていることを前提とされていました。つまり正確で、構成のルールに従っていることでした。私はそのことが良く分かっていました。私は自分の賭けに勝ちたかったのです。そして五年間、私は勝ち続けました。そこからは勉強するという観念を私に与えてくれました。というのも、その他のことは遊びでしかなかったからです。しかしながら、これらの輝かしい結果は、大きな勘違いの機会を与えることとなりました。優れた人物であるその教師は、私を既に理工科学校の生徒になると見ていました。先ず、私に文科と科学の二つのバカロレア（大学入学資格試験）を同時に受験させる計画を立てました。彼は私にこの助言を決して見逃しませんでした。しかし私は最後まで、一冊の本も開いて勉強しなかったこと、そして当然に正しく知らねばならなかった良く使う曲線を深く知らなかったことを、良く理解して置いて下さい。最早それは私の賭けではなくなっていました。要するに、恥ずかしいことに私は科学のバカロレアに不合格になりました。私の仲間たちが言っていたように、愚かにも不合格になったのです。それは私にとっては、些細な悲嘆でしかありませんでした。ところが私にとってショックだったのは、教師たちとその次に両親が、極めて不当に私が不合格にさせられたと思い込んだ儘でいたのを知ったことでした。私は抵抗しましたが、少なくとも私が言うことを聞いてくれませんでした。当時、私はそのことを反省させられましたし、今でも反省させられています。皆が私の頭の上に置いていたこの厚い信頼に、私は十分に応えなかったのです。私の仲間たちは、全学科で私に一番になる義務を与えていたのを私は十分気付いていました。この気持ちは、人間としての思い上がった考えを私に与えていたのです。というのも彼らは結局、子供に過ぎなかったからです。ところで彼らは、私が侮辱されていると分かると、彼らも侮辱されたのです。そして彼らは、そのことで私に非難することを良く覚えました。一番びっくりしたのは、歴史の教師の行為です。彼は何時も私が多くの知識がないとしても文才で書けるようなやり方で、作文の問題を出していました。彼はそのことを自分でも隠そうとしませんでした。そして仲間たちもそれで良いと感じていました。全員一致の意見によって、より高い運命へ赴いていた私は、全くの恩知らずでした。私は全時間を、ディケンズの小説とユゴーの『観想詩集』と音楽に費やしていたのです。

音楽は、幾何学と同時に私に啓示してくれました（おゝ、プラトンよ）。それは最も出来の悪い平凡な音楽でした。リセには、音楽の演奏を知っているが、細かい点まではこだわらない人物が指導する楽団がありました。私はコルネット(2)やトロンボーンやコントラバスのような易しい楽器を習いました。私には新規のものであった幾つかのパート譜、和音、不協和音に飛び込みました。最後には副指揮者になり、その資格で殆ど全てをやりました。私たちは裕福ではありませんでしたので、指揮者の譜面（ピアノ編曲）だけを購入して、私自身で各パートの演奏を斟酌しながら割り当てることを考えました。間違いながらも私は学びました。指揮者は最後に私を職人に扱いました。リセの学監が亡くなり、指揮者は弔意を表して（彼はカフェの経営者でした）、翌日に演奏する葬送行進曲を、質の悪い紙になぐり書きしました。私はその紙を受け取り、解読し、楽譜を見抜いて書きました。指揮者は練習を仕上げに来ました。その曲は短調の悲しいも

のでしたが、すっかり葬式の時聴かせる楽団のようになっていました。その曲の価値は何もありませんでした。私たちが演奏していたポルカやワルツや速歩行進曲と同じでした。しかし結局のところ和声は全ての音楽にとって同じものです。そこから私は音楽を知るようになりました。その時から私は、出来の良くない音楽にも大変な興味を持ち、人から望まれる限り書く能力を身に付けました。しかしその点では町の楽団のために、明日にも行進曲や舞踊曲を作曲すれば生活費を得ることが出来るのも確かでした。当時の私は、モーツァルトもベートーヴェンも聴きませんでした。その養成方法には良いことも悪いこともありました。私の初めの期間は、芸術を語ることよりも、お分かりのように別のやり方で芸術に興味を持つ好機があったのです。

私が理工科学学校へ入学する道は短いものでした。私は、パリのリセであるヴァンヴ校（後のミシュレ校）へ奨学生としての転校を勧められ、実際に転校しました。七月の入学試験が不合格になったので、十月にやり直さなければならず、数学の特別授業を受けなければなりません。私の父の古い友人で、昔から私がやることを見ていた人物が次のように突然私に言った時は、私が熱心さもなくこの道に這入って行くところでした。「それじゃ理工科学学校へ受験するのは止めなさい。高等師範学校文科なら、そんなに勉強しなくてもあなたなら合格するよ」。それは私の気に入りました。ヴァンヴ校の人々も何も言いませんでした。そしてこの様にして私は、今まで一度も考えたことがなかった道に投げ込まれたのです。

（次章へ続く）

（1）第四学級は、中学校二年程度の学年である。

（2）コルネットは、小型のトランペットである。

この翻訳は、《Alain, *Histoire de mes Pensées*, 1936》の全訳を企図としている。先ず、その初めとして全三十四章のうちの第一章の全訳である。テキストとしては、《Alain, *Les arts et les dieux* (Bibliothèque de la Pléiade), Gallimard, 1958》に所収されているものを使用している。我が国における本書の翻訳は既に幾つかあるが、アランの思想を斟酌しながら新たに出来るだけ丁寧に翻訳することは、私にとっての長年の課題であった。

又、アランことエミール＝オーギュスト・シャルティエ（本名）についての伝記を書くことを或る友人から勧められたのだが、アラン自身も言っているように私的なこと、家族や家庭のことをアラン自身は自ら書くのを嫌っていたため、局外者の私がアランの伝記を書くことはアランにとっては不本意のように思われた。又、生憎とその力量もない。従って、アランの精神にとっての伝記ともいえる本書を翻訳することで、その友人に応えたいと思う。

なお、本書を翻訳するに当たり、森有正氏（一九五一年刊）及び田島節夫氏（一九六〇年刊）の優れた訳書を参考にしたが、多くの教示を授かったことに感謝申し上げる。

そして、この翻訳を通して、何時の時代でも決して古臭くない新鮮なアランの思想を理解し、味わう契機になって戴ければ、訳者としてこれ以上の喜びはないと思っている。

(完)

## 執筆者のプロフィール（五十音順）

---

### 北岡善寿（きたおかぜんじゅ）

一九二六年三月十日生まれ、鳥取県出身。文化果つる所と言われたばかりか、県下の馬鹿の三大産地の一つという評判のあった農村に生まれ育ち、一九四三年に出来の悪い生徒が集まる地元の中学を出て上京したが、一九四五年三月現役兵として鳥取連隊に入隊。半年後敗戦で復員し再上京。酒ばかり飲んでいる無能なジレットにすぎなかった。大学のころは今は故人の北一平や東大生の本郷喬らと同人誌「彷徨」で一緒。一九七四年文芸同人誌「時間と空間」創立同人。二五号から六四号（終刊）まで編集担当。一九九四年「風狂の会」会員となり現在に至る。詩集『土俗詩集』（一九七八年）、『高麗』（一九八六年）、『樞』（一九九一年）、『痴人の寓話』（一九九四年）を出し、詩集以外のものとして随筆集『つれづれの記』（二〇〇三年）、『続・つれづれの記』（二〇〇九年）を出版。日本詩人クラブ会員。日本ペンクラブ会員。

### 齋藤 忘（さいとうまもる）

一九二四年五月十五日、ソウル生まれ。二一歳敗戦で単身帰国。本籍山形県鶴岡市。戦後唯一の月刊詩誌「詩学」に二五歳で発表。詩集『葬列』（彼方詩社）、『後生車』（無限）、『石墨草筆』（国文社）、『影ふみ』、『暗い海』（詩学社）、『遠い旅』（私家版）、『漢江の青い空』、『齋藤忘詩集』『夕映えの定期便』（土曜美術社出版販売）。評論集『植民地と祖国分断を生きた詩人たち』、『生理的抒情試論』『詩と自画像』（同上）。作品収録『戦後詩大系Ⅱ』（三一書房）、『日本現代詩大系12』（河出書房新社）、『精選日本現代詩全集』（ぎょうせい）、『日本の名詩』（平凡社他）。詩歴は「零度」、「現代詩評論」を経て「彼方」を二十年間発行。日韓文化交流に努め、韓国に知己が多い。元現代詩人会理事長（一九八七年～八九年）。二〇〇六年六月二日、杏林大学病院に入院中のところ急性腎不全による出血性ショックにより死去する。享年八二歳。静岡県駿東郡小山町の富士霊園に埋葬される。一周忌に『齋藤忘詩全集』刊行（齋藤忘詩全集刊行委員会編・土曜美術出版販売・二〇〇七年）。同書に所収されず、その後新たに発見された未刊詩篇が同人誌「風狂」に漸次掲載される予定である。

### 高村昌憲（たかむらまさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。学生時代に同人誌「遡行」を発行。詩集は『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A&E・二〇〇四年）。翻訳は『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロボ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ971・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤忘詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。一九九六年に個人誌「パープル」創刊（四〇号から電子書籍）、同年「風狂の会」会員になる。一九九八年に「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞（評論部門）。二〇一二年から電子書籍（ブクログのパー



)に、エッセイ集『アランと共に』、アラン作品の翻訳及び同人雑誌「風狂」などを登録中。日本詩人クラブ会員。

### 中平 耀 (なかひらよう)

一九三〇年生まれ、群馬県出身。詩集『吊るされた鳥』（思潮社・一九六一年）、『時の中の橋』（詩学社・一九七三年）、『樹・異界』（神無書房・一九八一年）、『花についての十五篇』（花神社・一九八六年）、『滑稽譚』（花神社・一九九二年）、『木』（花神社・一九九七年）。訳詩『マンデリシュタームの詩』（集英社『世界の文学15・ロシアⅢ』・一九九〇年）、詩評論『マンデリシュターム読本』（群像社・二〇〇二年）。二〇〇二年、『マンデリシュターム読本』により第四回小野十三郎賞特別賞。これからしたいことは、集大成した詩集を出すこと。

### なべくらますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会 日本詩人クラブ 時調の会 各会員

櫻自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつゞら』

エッセイ集『コリア スケッチラリー』（共著）

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

### 堀口精一郎 (ほりぐちせいいちろう)

一九二七年三月、東京生まれ。青春前期は皇国少年として熱血の血をたぎらせた、いわば戦中派のはしくれ。戦後は文芸特に短歌に親しむ。一九八九年仲間と共に詩誌「さやえんどう」創刊、詩を書き始める。

詩集『マンモスの轍』（土曜美術社出版販売・一九九四年五月）、『神の魚』（横浜詩人会・二〇〇〇年十月）などを刊行。

二〇一四年七月、二五年間編集発行人を続けてきた詩誌「さやえんどう」を終刊。

同じく二五年間実績を残してきた月二回の研究会も解散。身軽になった。

現在は、日本詩人クラブ、横浜詩人会、風狂の会に所属するのみ。今後は楽しく生きてゆきたいと思っている。なお未刊の詩篇が多数残っているので最後の詩集を出したい。

(以上)

同人雑誌（2014年8月創刊号）

## 風 狂（ふうきょう）

<http://p.booklog.jp/book/85664>

編集：風狂の会（担当：高村昌憲）

編集担当者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/85664>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/85664>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ